平成22年12月06日 発行 矢ヶ部 輝明

## 風景デザインレター from 九州(第35号)

久方ぶりに、川の風景についての話をしましょう。先月 11 月 28 日に発行された島谷先生の中小河川の多自然川づくりの技術基準。大河川の多自然は、原則水際の河川の姿を極力自然に戻すため、隠し護岸的に処理すればほぼ OK だったのに比べ、中小河川は、人間が川に求める機能や制約条件が川づくりを困難にしていました。今回の指針は、その解決策となるか!!?

五ヶ瀬川の現地において考えたこと、多自然川づくりの展望はいかに

## 【川は自然の姿を取り戻せるのか!】

先月の五ヶ瀬川の環境調査、11月は、アユ漁の最盛期ということもあり、五ヶ瀬川で、8人の漁協関係者や簗漁を行っている漁業者に、現場でヒアリングしながら、これからの川の姿について考えてみた。

ともかく今年のアユの少なさは ひどいという話であるが、その原 因が、ここ数年というもの台風が 宮崎を襲っていないということを 皆さん話す。護岸がコンクリート に変わったという問題以前に、台 風が来ないから駄目だということ であった。五ヶ瀬川のアユは、全 国的に有名であり、その簗の姿は、 地元の自慢の風物である。そこに アユが全くかからない。その理由 は、台風であるという。つまり、 回遊魚であるアユは、春に遡上を 始め上流に上っていくが、その上 流に上ったアユが、本来であれば 台風等による洪水で、途中にある 堰を超え一気に流され、下流の礫 の産卵床で産卵するのだが、台風 が来ないため、水が堰で下流にオ ーバーフローして流れないため、 アユが下れないということらしい。 五ヶ瀬川の堰には、アユのことを 考慮した魚道が設けられているが、 遡上のための魚道であり、降下の ための魚道ではない。つまり、こ れまで降下用の魚道などを作らな くてもよかったのは、台風のおか げであったということだ。人工的 なものの欠陥を、水害を引き起こ す存在である台風が補っていたの だ。だから、台風が来ないと、ア ユも取れないという皮肉な話。

同じような話は、有明海でも聞

いた。有明海が近年だめになっているのは、陸からの栄養塩の過剰の間題というより、台風が来ないるを攪拌することがなされいなを費けることができれいたが、澄んできれいたが、高調ではいたが、有明海になってきたという。高環境にの大きな原因だという。高環境保全に一役買っていたということだ。

五ヶ瀬川に話を戻すと、ここ 50 年間でその大きく姿を変えた川を、 いかに元のような川に戻すのか、 そのために長期的な視点でやるべ きことは何かという課題に取り組 んできたのが、多自然川づくりで あろう。今回の島谷先生の技術基 準の画期的なところは、洪水時に 現在より流速を早く流すような河 道にはしないこと、そのために、 必要であれば現在より川幅を広げ ることだ。しかし、用地の制約を 受ける都市部では、この議論は極 めて困難であり、この基準に基づ いて川幅を広げられる場所は、耕 作放棄地が沿川にある場合のよう な疲弊している中山間地域のよう なところでのみであろう。しかし、 ともかく 100 年の大系を考えての ことだと思うので、本来の川の姿 を取り戻すビジョンとしては重要 であり、指針として示したものだ。

50年前の川の姿に戻すには、川の形だけの問題ではなく、当然、流況がかわってしまっていることも重要な課題だ。数年前に「生命の川(いのちのかわ)」という画期的な本が出て、自然の川の流況を模倣した水の流れを再生すること



を実験的にやっている海外の事例 が紹介されていたが、その後の情 報がほとんど入ってこない。

そして、そのような問題に加え、 最近は、台風が来ない、ゲリラ降 雨のような雨の降り方のパターン が変わってきて、温暖化あるいは ヒートアイランド現象のような川 にとっては根本的な気象の変化と いう、どでかい、そして、人間の 手に負える話でないどうしようも ない問題も生まれつつある。

紀州流、甲州流のようなかつて の武田信玄や加藤清正のような河 川技術者の議論が、今再び、議論 となっている。河川技術としては、 その当時から進歩しているのか怪 しいことに加え、根本の気象条件 が変わりつつある。

現在、治水、利水、環境の3つをうまく統合した川づくりを目指してはいるものの、大きな問題を抱え、「日本の川らしい川」に戻すことが本当にできるのだろうか。

今回の河川技術基準。そこには、20年間の多自然川づくりに全精力を込められた島谷先生の最終にいる答えのようなものが書かれていると思うのだが、薄っぺらな聞いたことのない出版社からでたたりの円という現実が、川づくりの置かれている立場が、なぜかわかと考え込んでしまう。【続く】